

昭和36年才6次（自昭和三十六年四月一日）平城宮跡発掘調査終了報告  
至同 年六月十五日

特別史跡「平城宮跡」才6次調査は、国有地の一郭と、佐紀中町の一条通北側で行つた。前者は、出土遺物整理用倉庫建設予定地の調査として、発掘調査事務所の西側約8アールを4月1日から調査し、後者は、排水不良で夏期調査不能地域57アールを、予定よりくりあげて調査したもので、4月24日に始めて6月15日に完了した。

倉庫建設予定地では、東西にのびる柱間3m等間の掘立柱の複廊が検出された。この複廊は国有地となつている朝堂院跡の中軸線附近から東へ14間確認され、そこで南折して単廊となる。東西複廊の北側は、南北単廊の西側柱通りの位置で北へのびる3m等間の掘立柱列がとりついている。そのほかに、この廊より新しい掘立柱列が、単廊の西2mに平行して一列9間（柱間3m）あり、また東西に走るおそらく柵かと思われる掘立柱掘方列が3列認められた。

この地域の地層を検討したところ、南と北では表土直下の地山に遺構が認められたのに対して、中央附近では、巾16m深さ15m以上の濠状の凹所を埋立てた埋土上に遺構が造営されていることが判明した。この濠状の凹所は埴輪片や礫の出土をみるのみで、平城宮以前の遺構であることは確かである。この凹所は、電探で調査したところ東西にのび、ほゞ150mほど

追跡し得た。

今回の調査で検出された東西複廊は、さらに西へ延び、朝堂院一郭中軸線で対称になるものとすれば、東西約90mほどになる。南北単廊は、大正13年の官跡整備工事に際し、大極殿北方約60mで検出された凝灰岩切石溝の部分に連るものと推定され、才3次調査であきらかにされた築垣回廊をめぐらす内裏の中央南より、さらにいま一つの東西90m南北75mの掘立柱回廊で限られた一郭があることになる。

一条通り北側の地域は、才5次調査で北半を調査した水田の南半にあたる。検出された遺構は、溝、石敷、掘立柱建物1棟、土器溜である。才5次調査終了報告の群別によつて述べると、まず、Ⅰ群またはⅡ群に属するものとして、調査地域の中央南より巾4mほどの浅い東西にのびる濠状の凹所がある。この凹所を埋没し、その北辺ぞいに部分的に礫を耳石に用いた巾50cmほどの溝が造られるが、この溝はほぼⅢ群の石敷にのみあるものである。次でⅣ群間の盛土がこの地域にもおよび、その盛土上に石敷遺構が検出された。この石敷はさきの溝の東端附近に位置し、西と南は巾70cmほどのやゝ大きめの礫を敷並べた額縁状部分とその内に敷かれた小礫部分とからなる。性質は不明である。その後Ⅰ群に行われた盛土が全域に認められ、その上にて間×5間（柱間24m）の南北棟の建物が造営されている。この建物の廃絶後、調査地域の東西両辺に長くのびる土器溜が形成されている。才5次調査

X群の土器溜の南への延長部分にあたる。

遺物としては、土器溜から発見された土器類が最も多く、なかに「平安」と墨書された須恵器片や施釉陶片が約30個体あつた。瓦類では、回廊部分で発見されたものに小型のものが多かつたことが注意される。

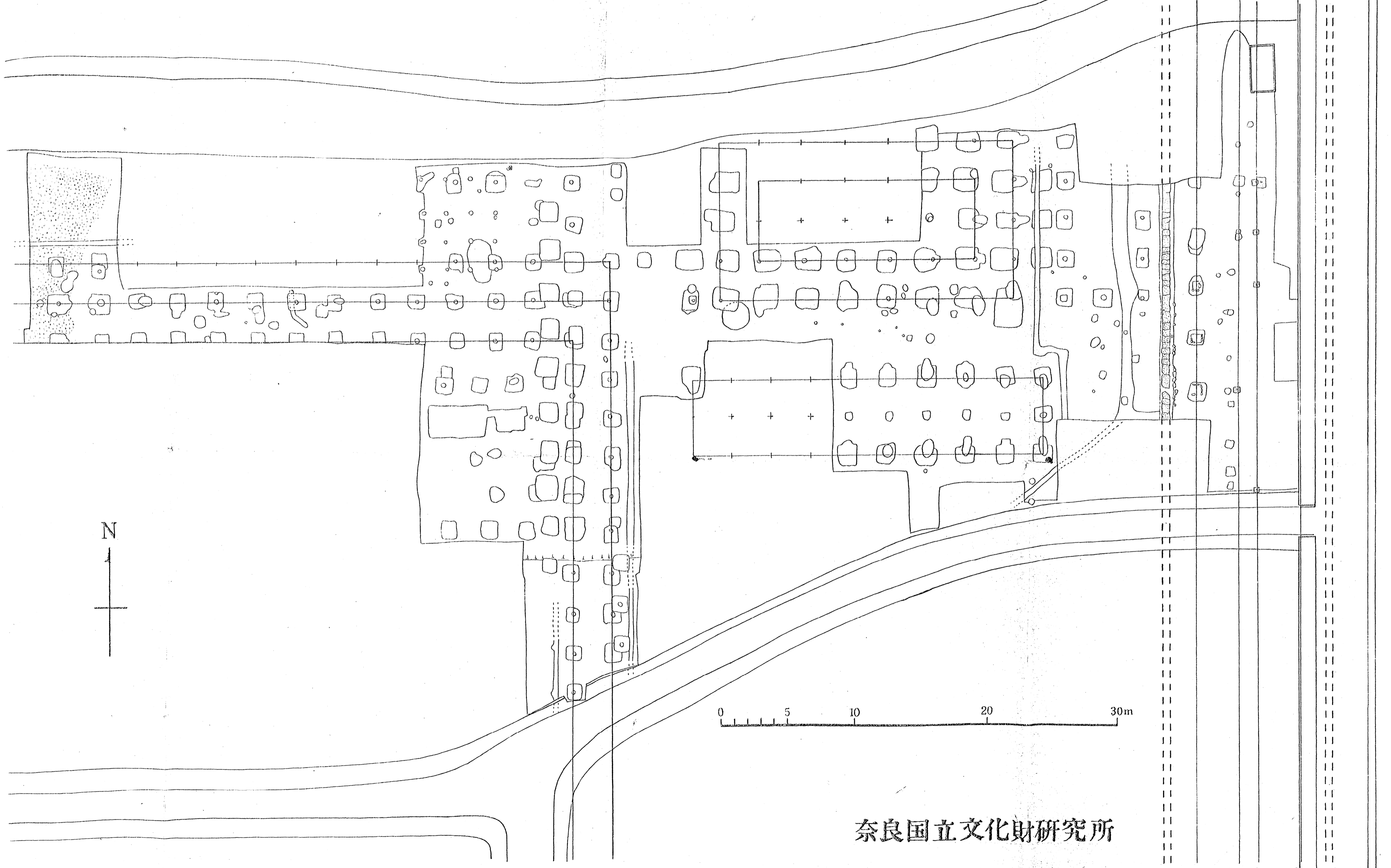
以上が今回の調査結果の概略であるが、とくに今回の調査では農繁期に入る時期のためもあつて、人夫出勤数がはなはだしく減少した。これによつて調査能率の低下がいちじるしく作業もしばしば停止せざるをえなくなつて進捗をさまたげ、倉庫建設予定地の埋戻しが完了しないのもこのためであつた。

發見遺物

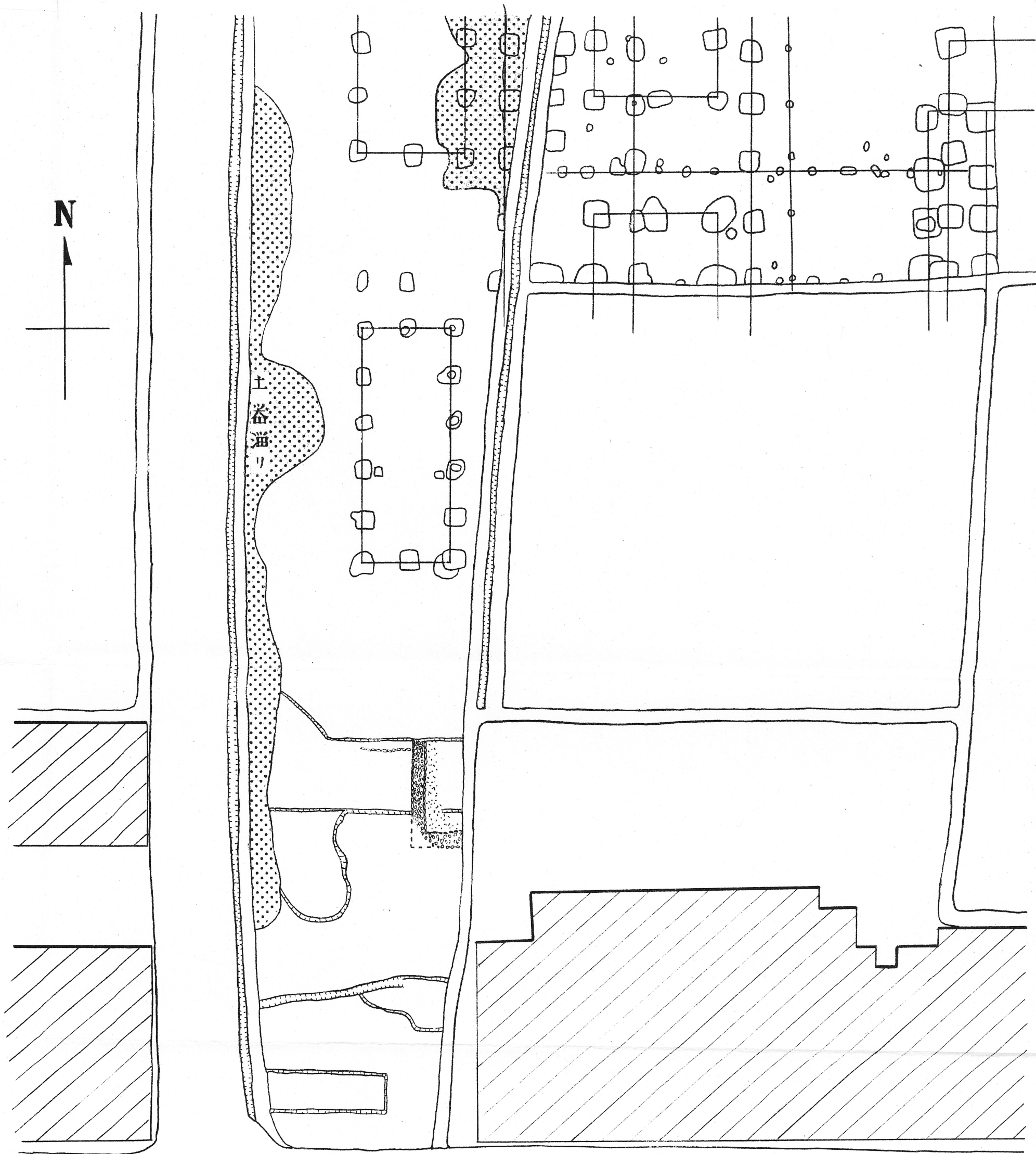
土	須	施	平	鬼	軒	軒
師	惠	釉	瓦		平	丸
器	器	陶	丸	瓦	瓦	瓦
		片	瓦			

			約			
14	2	30	20	1	57	59
箱	箱	個	袋	個	個	個
		體				

# 平城宮跡 第Ⅲ・Ⅵ次発掘遺構配置図



奈良国立文化財研究所



平城宮跡 第VI次発掘遺構配置図